

● 全面教育 ●

生きる力を育てる気賀小教育の実現 ～資質・能力を育むための主体的・対話的で 深い学びの実現～

静岡県 浜松市立気賀小学校（校長 安藤憲）

- ① どの教科・領域等の授業でも実現させたい主体的・対話的で深い学びの姿の設定
- ② ワーキングチームでの「学びのプラン」の作成
- ③ 子供が「見方・考え方」を働かせている姿を具体的に描き、手立てを明確にして深い学びの実現を目指す授業実践

【はじめに】

本校は、浜松市の北部、北区細江町のほぼ中央に位置している。豊かに水をたたえた井伊谷川と都田川の清流が合流する地点があり、北は赤石山脈に続く丘陵地帯、南は三方原台地、西には浜名湖が広がっていて、豊かな自然に囲まれている。江戸時代の気賀関所跡がすぐそばにあり、古くから交通の要所として栄え、学区には文化・経済・政治の中心としての施設が集まっている。自然と温暖な気候に恵まれた歴史と文化が息づいている地域である。

本校は、児童数 517 名、21 学級の中規模校であり、令和 4 年度に 150 周年を迎える伝統のある学校である。



◆正門から見た南校舎



◆運動場から見た中校舎・北校舎

I 研究構想

1 研究主題設定の理由

本校は、昭和 56 年度から「生きる力を育てる気賀小教育の実現」を研究主題に据えて継続研究に取り組み、40 年目を迎える。長年に渡り積み上げられてきたよき伝統を生かしつつ、新しい時代に対応した気賀小教育を実現するため、実践を積み重ねてきた。また、平成 4 年度からは、「生きる力を育てる気賀小教育の実現」を学校教育目標とし、全教育活動の中で子供たちを育てていく全面教育、教師集団の指導力の向上、地域と一体となった学校経営を目指して、研究を推進してきた。目の前の子供たちの「生きる力」を育てるために、「不易と流行」のバランスをとり、変化に対応しながら、「今、子供たちに必要なことは何か」「人として変わらないものは何か」を問い続け、実践していくことが大切であると考えた。

本校では、長年掲げている「生きる力」をその時々で見つめ直し、共通理解し、具体的実践を重ねることで「目指す学校像」の実現を図っている。平成 27 年度からは、「自他のよさを認め、自分を律し、何事にも主体的に関わり、たくましく生き抜く力」と押さえている。これは、学習指導要領の改訂の基本方針として示されている「生きる力」の意義と同様であると捉え、研究主題「生きる力を育てる気賀小教育の実現」を継続し、研究に取り組んでいくこととした。

2 目指す子供像と学校像

本校では、「生きる力」が身に付いた子供たちの姿を目指す子供像として掲げ、その先に集団としての姿である目指す学校像が実現されると考えた。

目指す子供像は、知・徳・体のバランスのとれた人間形成を目指し、「学び合う子」「思いやる子」「たくましい子」と設定した。「学び合う子」とは、意欲的に学習し、学び合いを通して、課題をよりよく解決する子である。「思いやる子」とは、思いやりの心が育ち、「ひと・もの・こと」とよりよく関わる子である。「たくましい子」とは、心身が健康で、進んで挑戦し、最後までやり抜く子である。

「学び合う子」「思いやる子」「たくましい子」がつくる学校が、目指す学校像の「日本一の挨拶がこだまする学校」「厳しいけれど楽しい学校」「理想を高く掲げる学校」であると考えた。「日本一の挨拶がこだまする学校」とは、いつでも、どこでも、誰にでも、明るい表情、さわやかな声で自然に挨拶を交し合い、そのような挨拶の音が響き合う学校である。「厳しいけれど楽しい学校」とは、本気で取り組み、困難に立ち向かうことで、充実感という真の楽しさを味わえる学校である。また、ルールやマナーを守り、互いが気持ちよく過ごし、楽しく生活することができる学校でもある。「理想を高く掲げる学校」とは、理想や目標を明確にかつ高く掲げ、子供たち自身が自らの力を引き出すことができる学校である。

3 グランドデザイン



4 研究の方法

本校では、一つの教科や領域の研修に取り組んでも「生きる力」は育たないと考え、すべての教育活動を充実させ、互いに関連させながら取り組む全面教育を推進していくこととした。具体的には、「よい授業」「特別活動」「健康教育」「道徳教育」「生徒指導」の五つの教育活動を「生きる力」を育てる柱としていくこととした。

本校では、キャリア教育の視点を核としながら、これらの五つの教育活動を軸として継続研究を進めた。

- ・学ぶ楽しさを味わい、確かな学力を培う「よい授業」
- ・進んで活動し、協力してよりよい学校生活を実現する「特別活動」
- ・心とからだをきたえ、生き生きと活動する「健康教育」
- ・一人一人がよりよく生き、仲間と共に高め合う「道徳教育」
- ・一人一人のよさや可能性を伸ばし、楽しい学校生活を送る「生徒指導」

五つの教育活動においては、生きるために必要な力を身に付ける「基礎・基本を大切にする教育」(習得)と身に付けた力を進んで活用し、一人一人がよさを発揮して高め合う「可能性を伸ばす教育」(活用)の場面を設定し、P (Plan) → D (Do) → C (Check) → A (Action) のサイクルを繰り返すことで「生きる力」を育てていくこととした。

5 研究の重点

本校では、五つの教育活動の中でも「よい授業」の創造こそが「生きる力」を育てることに直結すると考え、学校教育における最重点と捉えた。

これまでも、学び合いのある授業や基礎・基本の定着、真剣な学習態度の育成を目指してきた。しかしながら、今、目の前の子供たちに必要とされる「生きる力」を見つめ直したとき、「よい授業」をさらに創造するためには、各教科・領域等において育成を目指す資質・能力を改めて捉え直し、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた取り組みが必要であると考えた。

そこで、研究の重点を「資質・能力を育むための主体的・対話的で深い学びの実現」とし、研究を進めていくこととした。

II 研究の方策

1 実現させたい主体的・対話的で深い学びの姿の設定

本校では、どの教科・領域等の授業でも実現させたい主体的・対話的で深い学びの姿を次のように描いた。

- 見通しをもって粘り強く取り組む姿
- 学びを振り返り、次につなげる姿
- 様々なひと・もの・ことと関わる中で様々な視点に気付き、考えを再構成する姿
- 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を関連付けてより深く理解したり、思いや考えを表現したりする姿

これらの姿を実現させるために、各教科・領域等でワーキングチームを組織し、研究を進めていくこととした。

Ⅲ 実践の内容

1 「学びのプラン」の修正・改善

ワーキングチームごとに「学びのプラン」を基にして指導案検討や模擬授業、授業実践、事後研修等を進めた。そして、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて設定した具体的な手立てが、単元や題材を通して資質・能力の育成のために効果的であったかを検討した。



◆事後研修での意見交流

<具体的な方策>	平成31年4月
① 学習のゴールを設定したり、授業を振り返ったりする学習場面を分析し、取組む。	【主体的】
② 実態に合わせて、身近な話題や現代的な社会問題を取り上げたり、自己の在りしる。	【主体的】
③ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめさせる。	【主体的】
④ 互いの立場や意見を明確にしながら、「あなたが必聴き方」「やさしい話し方」を話し合わせる。	【対話的】
⑤ 教材に向き合い、筆者や登場人物など対話させる。	【対話的】
⑥ 既知知識に照らし合わせながら、考えを固めたりまとめる。	【深い学び】
⑦ 「あなたが必聴き方」「やさしい話し方」を意識させ、相手思いややる。	【深い学び】
⑧ 個に応じた支援を効果的に行うために、正解の実態を正確に把握する。	【深い学び】

<方策>	令和3年3月現在
① 目的や必要性、相手を意識し、学習計画を子供と一緒に立て	【主体的】
② 自己の学びを修正しながら学習に取り組むことができるよう、学びを振り返り、学習状況	【主体的】
学習内容が生活や社会につながるような単元を構想する	【主体的】
④ 資質・能力の獲得に向かうために必要な言葉（目）でできるように、視点を調整した上で、自分が理解したり表現したりした	【対話的】
⑤ 言葉による見方・考え方を働かせながら、言葉による見方・考え方を働かせながら改めて言葉に着目し、自分の考えを	【対話的】

◆「学びのプラン」の変化

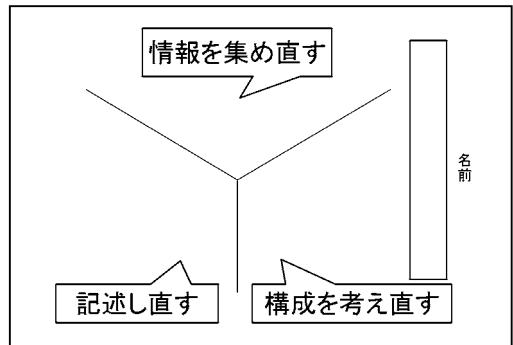
研究を進めるに従い、「学びのプラン」そのものも変化していった。例えば、研究当初は、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を切り分けて考えようとしていた

ものが、研究を進めるにつれ、一体として考えられるようになっていった。また、方策が、授業をより広くより深く組み立てようとするものとなっていった。

このように、授業と「学びのプラン」を連動させることで、双方がより良い方向に向かっていった。

2 深い学びの実現を目指す国語科の授業実践

第5学年国語科「グラフや表を用いて書こう」の実践では、深い学びを実現していくために、国語科の特質である「言葉による見方・考え方」を働かせている姿を『「情報』『構成』『記述』を視点として、内容や言葉に着目して文章を読み合い、資料を根拠にした適切な表現であるかを吟味する姿』と押さえた。その姿を実現するために、Yチャートを用いて「情報を集め直す」「構成を考え直す」「記述し直す」という視点で文章の良い点や課題を分類できるようにした。



◆文章の良い点や課題を分類するためのYチャート

授業では、子供が、友達と文章を読み合い、視点に沿って文章チェックリストを使いながら付箋紙にアドバイスを書いて渡した。



◆文章構成についての児童の交流

「人口が減ると、どんなことがよくないのかな。もう少し自分の考えを入れると、いいんじゃないかな。」「そうか。事実ばかり述べていて自分の考えが少なかったな。もう少し、自分の考えを加えてみよう。」

推敲する視点が明確になることで、段落の内容や一つ一つの表現に着目しながら文章を吟味し、的確な指摘をすることができた。



◆付箋紙を分類したYチャート

友達からもらった付箋紙をYチャートに分類することを通して、子供たちは、自分の文章を客観的に捉え、文章を直したいという思いや改善するための学習の見通しをもつことができた。

このように、教師が言葉による見方・考え方を具体的に描くことで、子供たちは、



◆自分の文章を客観的に捉え、次時の学習への見通しをもつ

言葉に対して自覚的になり、自分の考えが伝わるように工夫しながら意見文を書くことができた。

3 深い学びの実現を目指す音楽科の授業実践

第3学年音楽科「音のひびきでおしゃべり」の実践では、深い学びを実現していくために、音楽科の特質である「音楽的な見方・考え方」を働かせている姿を「音楽に対する感性を働かせ、音素材の音の響きやそれらの組合せ、自分たちの即興的な表現を音色や音の重なりとそれらの働きの視点で捉え、捉えたことと自分の感じたよさや面白さ、美しさや居間の会話の様子のイメージなどと関連付けて考えている姿」と



◆表したい会話について決める

押さえた。その姿を実現するために、「表したい居間での会話の様子を決める」「アドリブで表現する」「アドリブで表しているときに考えていたことを伝え合う」の三つの活動を順に繰り返すようにした。

例えば、あるグループでは、居間でのわいわい、がやがやしている様子を表現しようと考えた。それを即興的に表現する際に、子供たちが音素材の響きやそれらの組合せ、それらが生み出す面白さや美しさの視点で捉えられるように、アドリブで表しているときに考えていたことを後で伝えるということを念頭に置かせた。

そうすることで子供は、「騒がしい感じ



◆表したい会話のイメージと音素材の響きを関連付けて考えて表現する



◆自分たちの即興的な表現をどのように捉えていたかを伝える

の音がお椀から出ていたから、わたしも箱を強くたたいて騒がしい音にしてみたんだよ。」と考えたことを伝えることができた。

また、他のグループでも子供は、「内緒話だから小さな音で、響きもあまり無いようにした。」「『楽しいおしゃべり』だったから強くたたいたり大きい音を出したりすることをイメージして表現した。」などと伝え合うことができた。



◆音素材の音の響きに耳を傾ける

このように、教師が音楽的な見方・考え方を具体的に描くことで、子供たちは、音素材の響きやそれらの組合せを、表したい居間での会話の様子イメージや音色の重なりなどと関連付けて考えて表現し、音楽づくりの発想を得ることができた。

Ⅳ 研究の重点における成果と課題

1 「学びのプラン」

ワーキングチームで「学びのプラン」を作成することを通して、育成する資質・能力や目指す子供像・方策等を共有することができた。また、同じ視点から授業改善の方向性を協議することで、学習指導要領の理解が深まった。

今後とも子供の資質・能力を育むために、変化する子供の実態を的確に捉え、「学びのプラン」の修正を継続していくとともに、各ワーキングチームでの研修成果を広げ、研修教科以外の教科でも「学びのプラン」を基にして授業を実践できるようにする必要がある。

2 「見方・考え方」を働かせている姿

単元における「見方・考え方」を働かせている姿や本時における「見方・考え方」を働かせている姿を具体的に思い描き、深い学びを実現させるための学習過程や方策を設定して授業実践をすることで、学習内容を自分ごととして捉えて思考をめぐらせ、知識を関連付けてより深く理解したり、思いや考えを表現したりする子供の姿が多く見られるようになった。

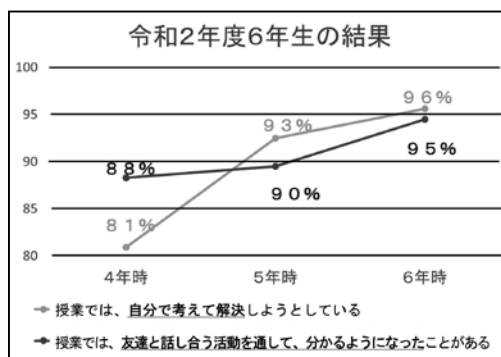
しかし、それらを不明瞭な状態のままでは授業を行うと、子供が「見方・考え方」を働かせる場や活動が保障されず目標の達成が容易でなくなり、資質・能力の育成が不十分になってしまう。単元における「見方・考え方」を働かせている姿や本時における「見方・考え方」を働かせている姿の具体を明確に描き、深い学びに向けた授業を行うことが大切である。

3 児童アンケートの結果

毎年行っているアンケート結果によると、「授業では、自分で考えて解決しようとしている」「授業では、友達と話し合う活動を通して、分かるようになったことがある」と肯定的に回答をしている子供の割合は、高い水準を維持していることが分かった。

また、6年生の結果を見ると、「授業では、自分で考えて解決しようとしている」「授

業では、友達と話し合う活動を通して、分かるようになったことがある」と肯定的に回答をしている子供の割合は、4年時、5年時、6年時と高い水準の中で伸びが見られたことから、授業が問題解決的、協働的な学習になっていたと考えられる。



一方で、「授業がよく分かる」という項目で否定的に回答をしている子供が平成30年に9%、令和元年に13%、令和2年に12.7%いることから、学びの困難さを実感している子供が一定数いることが分かる。今後、子供一人一人のニーズに応えるために、多様な個に応じた学習指導を充実させる必要がある。

【おわりに】

「資質・能力を育むための主体的・対話的で深い学びの実現」を重点とし、研究実践を進めることで、「生きる力を育てる気質小教育の実現」に迫ることができた。

しかし、上記のような課題も明確になった。今後も研鑽を積み、主体的・対話的で深い学びを実現することで資質・能力を育み、生きる力を育てる気質小教育を進めていきたいと考えている。

(研修主任：松井康子)